

奇形の発生頻度に関する研究

(分担研究：宮崎県下の病院での奇形発生頻度の研究)

早川国男* 大堂庄三* 園田 徹*
戸越智子* 大庭健一*

要約 1990年4月1日から1990年12月末日までの期間に、宮崎県下の5病院(公立病院2、開業産婦人科医院3)の産科で出生した新生児について調査した。

出生した新生児数は、死産の4も含めて1,630であった。その中で、生後1週以内に先天奇形をもつと診断し得た症例は8例【先天性小腸閉鎖、左軸前性多指、左膝蓋骨欠損、左IV/V合趾、口唇裂、Down症候群、骨系統の多発奇形(仙椎無形性、下肢低形成)、右ホルネル症候群]であった。これらのうち、骨系統の多発奇形を認めた症例の母親がインスリン依存性糖尿病であり、そのための奇形であると推測されたが、他の症例については原因となる要因を見出せなかった。

見出し語：奇形の頻度、催奇形因子

- 研究目的**：1. 宮崎県下での奇形の発生頻度を知る。
2. 胎児がさらされている環境要因を知る。
3. 妊婦の異常(疾患)の頻度とそれらの胎児への影響を知る。

研究方法：研究班に加えていただいてから、調査開始までに日数的余裕がなかったことと、将来リスク因子の頻度を比較できる利点も考慮して、神奈川県で行われている項目とほとんど同じ事項について産婦から聴取した。産科受診の際と出生後に産婦から聴取した事項及び出産後に新生児を診察して記載した事項は下記の通りである。

(1)出生年月日、(2)性別、(3)妊娠週数、(4)出生時体重、(5)単・多胎の別、(6)産婦の年齢、(7)夫の年齢、(8)初産・経産の別、(9)両親の血縁関係、(10)母方祖父母の血縁関係、(11)過去の妊娠歴、

(12)奇形児出産の既往、(13)産婦の喫煙習慣、(14)夫の喫煙習慣、(15)妊娠初期の異常、(16)妊娠初期の飲酒歴、(17)妊娠初期の薬剤使用、(18)妊娠初期の放射線被曝、(19)妊娠前の大量放射線被曝、(20)両親の職業、(21)診察—①大奇形の有無 ②小奇形

結果

1. 調査した期間に出生した新生児は、死産4例も含めて1,630例であった。そのうち、男児が813例(49.9%)、女児が817例(50.1%)である。
2. 分娩時週数：
早産児は66例(4%)、過期産児は8例(0.5%)であった。
3. 低出生体重児は、男児46例(5.7%)、女児60例(7.3%)であった。
4. 双胎は10組20人で、3胎およびそれ以上の多胎の出生はなかった。
5. 調査新生児出生時の母親の平均年齢は、28.2歳であり、父親の平均年齢は31.3歳であった。
6. 両親の血縁関係では、いところが2例、それより遠い血縁関係のものが3例であった。母方祖父母の血縁関係では、いところが16例で

*宮崎医科大学小児科 (Department of Pediatrics, Miyazaki Medical College)

あった。

7. 以前に奇形児を出産したことがある産婦は16人で、先天性心疾患6例、Down症候群4例、多発奇形、口唇裂、口蓋裂、骨形成不全、左軸前性多指の各1例、水頭症をもつ小児1例と先天性心疾患児1例の2人をもつ1例であった。
8. 産婦で妊娠中のいずれかの時期に喫煙の経験のあるものは31例(2%)であり、妊娠期間を通して喫煙したものは10例であった。したがって、妊娠中に喫煙した経験のあるものの合計は、41例(2.5%)であった。
9. 妻が妊娠中に喫煙をしていた夫の数は1,048例で、全体の64.3%であった。そのうちの51.1%は1日に20本以上の喫煙者であった。
10. 妊婦の妊娠初期に認められた異常は、次の通りである。
 - (1) 性器出血：209例(12.8%)で何らかの出血が認められた。そのうち、2例はポリープによるものであり、1例はびらんによるものであったが、その他の例では原因不明であった。
 - (2) 妊娠中に38℃以上の発熱を認めたものは38例(2.3%)であった。
 - (3) 母親にてんかんがあり、妊娠中に抗てんかん剤の服用を継続した例が1例あった。
 - (4) その他の異常を認めた例が17例あり、そのうちの3例は卵巣摘出術を受けていた。
11. 妊娠初期の妊婦の飲酒歴：
 - (1) 妊娠期間中にまったく飲酒しなかった例は、1,372例(84.2%)であった。
 - (2) 妊娠期間に、少量複数回以上飲酒した経験のあったものは246例(15.1%)であり、妊娠期間に中等量の飲酒の経験のあるものは12例(0.7%)であった。
12. 妊娠初期の薬剤使用：
 - (1) 妊娠初期に何らかの薬剤を1度でも使用したものは、243例(15%)であった。
 - (2) 使用した薬剤で最も多かったのは、かぜ薬で85例、次いで解熱鎮痛剤23例、抗生物質22例、胃腸薬21例などであった。
13. 妊娠初期の放射線被曝：

歯科での治療のためのX線撮影が最も多く27例、次いで胸部単純撮影22例、胃の透視3例、腰椎単純撮影、腹部単純撮影、腹部CTスキャンが各2例、頸部単純撮影1例であった。

14. 妊娠以前の放射線被曝

全身のCTスキャン検査を受けたものが1例のみであった。

調査期間中に出生した奇形児：調査期間中に出生し、診断し得た奇形児は、結局8例で全調査児の0.5%にあたる。

これらの症例の奇形の種類と関与したと推測される要因を次の表に整理した。

認められた奇形	性別	考 察
先天性小腸閉鎖	女児	低出生体重児であった。小児科に転科後に各種臨床検査を行ったが、成因は不明であった。
左軸前性多指	女児	母親が以前骨形成不全症児を出生しているが、本症との関連性は不明。
左膝蓋骨欠損	女児	系統疾患はない。明らかなるリスク因子もなく、成因不明。
左IV/V合趾	男児	成因不明。
口唇裂	男児	母親は出産時35歳。本児を妊娠する1年半前に全身のCTスキャンによる検査を受けているが、因果関係は不明。家族歴はない。
Down症候群	男児	21トリソミー型。両親ともに患児出生時には24歳であり、発症要因は不明。
仙椎無形性下肢形成不全	男児	母親がインスリン依存性糖尿病であり、妊娠中にもインスリン治療を継続した。 過去に類似の記載があり、母親の糖尿病が原因と推測される。
右ホルネル症候群	男児	先天性であることは確認。成因不明。

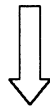
Abstract

We conducted investigation of all newborn babies in five hospitals located in Miyazaki prefecture during the period from April first 1990 to December 31 in the same year. The number of newborns including four stillborn infants was 1,630 in total, and in it eight babies (0.5%) were diagnosed to have congenital malformation, including each one case of congenital obstruction of the small intestine, the left preaxial polydactyly, the defect of the left patella, the syndactyly between IV and V toes, the cleft lip, the Down syndrome, multiple skeletal malformations (aplasia of the sacral vertebrae and hypoplasia of the lower limb), and the right Horner syndrome. The mother who bore the baby with the multiple skeletal malformations had insulin-dependent diabetes, and it was conjectured to be the cause of multiple malformations, but we failed to trace the etiology of other malformations found in the other cases.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 1990年4月1日から1990年12月末日までの期間に、宮崎県下の5病院(公立病院2、開業産婦人科医院3)の産科で出生した新生児について調査した。

出生した新生児数は、死産の4も含めて1,630であった。その中で、生後1週以内に先天奇形をもつと診断し得た症例は8例[先天性小腸閉鎖、左軸前性多指、左膝蓋骨欠損、左合趾、口唇裂、Down症候群、骨系統の多発奇形(仙椎無形性、下肢低形成)、右ホルネル症候群]であった。これらのうち、骨系統の多発奇形を認めた症例の母親がインスリン依存性糖尿病であり、そのための奇形であると推測されたが、他の症例については原因となる要因を見出せなかった。